



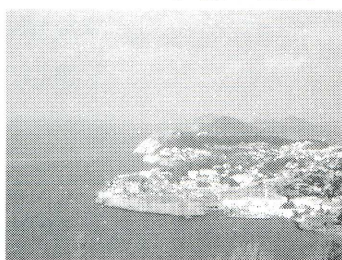
◀特別寄稿▶

海外の街並み紹介

アドリア海の実珠
ドゥブロヴニクの旅

伊藤 里枝

陽光あふれる青海原に突き出た堅牢な市壁、その内側にひしめくオレンジ色の屋根、屋根、屋根…。クロアチア共和国の一都市ドゥブロヴニク旧市街を知ったのは、カレンダーに掲載された写真を見た時だった。「こ



ドゥブロヴニク旧市街遠景。アドリア海に突き出した旧市街は、世界遺産となっている。

んなきれいな所が、この世にあるのか」と、その時思った。世界遺産を撮った写真を見ると、たいていは「こんなきれいな所が…」とってしまうし、バルカン半島のアドリア海沿岸には、宮崎駿アニメ「魔女の宅急便」の背景にある様な中世の佇まいが残る美しい街が点在しているのだが、中でもこの「海に突き出した位置」は格別で、写真の中の「青とオレンジ色のコントラスト」と「波に洗われる分厚い市壁」は、真っ直ぐ私の中に飛び込んで来て強烈な印象を残した。ということで、疲れることを承知で、また出かけてしまったのである。



旧ユーゴスラビア内戦時の爆撃により、約80%の屋根が破壊された。現在も修復は続いている。

私は、大自然の雄大な美しさに包まれることも好きだが、古代の人々の生活が偲ばれる遺跡の中に身を置くことも好きである。しかし、そのどちらよりも、美しい街並みが残されつつ現役の街として日常生活を垣間見ることができる旧市街を歩くことが好きである。ドゥブロヴニク旧市街は、現在約1,800人が住む現役の街である。

50クーナ（約1,000円）を支払って、一周約2kmある市壁の上を、強い日差しを浴びながら歩いてみた。市壁を挟んでおだやかなアドリア海とオレンジ色の葺の波が眼下に広がり、手を伸ばせば届いてしまうくらい近い住宅の窓からは、住人の話し声や食器がぶつかり合う音などが聞こえてくる。

500m四方に満たない街を覗き込めば、ほぼ中央に全長約380mのメインストリートが東西を貫き、公共水道、教会、学校、病院、老人ホーム、ホテル、商店、レストランなど生活に必須のインフラや施設を、ほぼ中世に整備された当時のままの姿で見ることができる。中世のドゥブロヴニク共和国は、ヨーロッパで最も早く公衆衛生と住民福祉が充実した都市国家であった。



メインストリート、ブラツァ通り

ドゥブロヴニク旧市街は、もともとは小さな岩石の島だった。7世紀初頭に、遊牧民族の襲撃を逃れて移住してきたローマ人の末裔がつくった漁村から都市の歴史は始まる。その後、ビザンティン帝国の下で成長し、地中海貿易の要衝となったため常にバルカンの列強から干渉されることとなる。13世紀には都市国家ヴェネチアの支配下に置かれ、14世紀にはハンガリー王国の、16世紀にはオスマン帝国の保護下に置かれたが、ドゥブロヴニク人は周辺諸国に約80もの領事館を置いて情報収集に努め、巧みな外交政策によって戦争、侵略の危機を切り抜けた。さらに、そうすることによって獲得した「自由」と「独立」がもたらす貿易利益を恵まれない人々のために使い、経済的格差より生じる争いから内部崩壊につながらないように内政にも力を入れた。小さなドゥブロヴニク共和国には、列強と戦争をしても勝ち目があるはずはなく、戦後は占領され搾取されて、人権の保障などないことは火を見るよりも明らかである。民族の興亡の舞台であったバルカンの一隅に生き、多くの情報を得ていたドゥブロヴニク人は、滅び行く他国の悲惨さと滅亡の理由をよく理解し、人間らしく豊かに生きるためには「自由」と「独立」が何にも代えがたい大切なものであることを強く認識していた。

ドゥブロヴニク共和国はナポレオンにより解体されて終焉を迎えるが、中世の美しい街並みはそのまま現代まで残り、1979年には世界遺産に登録された。ドゥブロヴニク人が、何世紀にも渡り知恵と努力により自由と独立を守り抜いたおかげで、美しい街並みは私達の宝としてもたらされた。

しかし、それがあっけなく失われたのは現代20世紀の終わりになってから、いわゆる1991年に勃発したクロアチア独立戦争（旧ユーゴスラビア内戦）においてだったというのは、何とも情けなく遣る瀬無い。



ここで、私達のツアーバスの運転手マリオさんの話をしたいと思います。

観光初日、添乗員さんに紹介されあいさつに立った長身の彼は、少しはにかみながら「みなさんが旅を満喫できるよう精一杯頑張ります」と言った。添乗員さんによれば、クロアチア人、特にドゥブロヴニク人は基本的におおらかで、親切な人ばかりだという。アドリア海沿岸の気候と美しい街並み、そして市民が大切にされた歴史が、人をそうさせるのだと思う。

しかし、旧ユーゴスラビアの内戦に駆り出され、直接戦闘に加わった経験を持つ人達の中には、どこか翳があり、銃弾を浴びて穴だらけになった建物を目ざとく見つけて指差しては、よく見るよう促す人がいるそうだ。そこへいくと我等が運転手マリオさんは、ドゥブロヴニク近郊の街に生まれ育ち、内戦当時は14歳。身近に戦争を体験したとは言え、心に未だに癒えない傷を負わずに済んだせいか、いつもあいまいな笑みを浮かべはるかすようにしながら、どこかほわんとした長閑な雰囲気のを漂わせている。運転もたいへん穏やかで、予定通りにホテルに到着して温かい夕食にありつけるだろうかと気を揉む私達をよそに、道を尋ねられればそれに答える余裕の見せようであった。

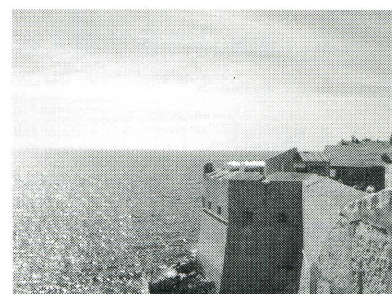
しかし、ある朝、そんな彼の顔から笑みが消えた。出発時間を過ぎてもなかなか運転席に着こうとせず、ホテルの前につけた数台のツアーバスの間を行ったりきたりしていたが、とうとう諦めた様子でバスを出した。彼の荷物がなくなったのである。どの程度の物を失ったのかはわからなかったが、彼はずっと暗い顔をして黙々と運転業務を遂行していた。悪いことは重なるもので、その日の3番目の観光地に到着する直前に、今度はバスが故障して動かなくなってしまった。このことは、私達ツアー参加者にとっても影響があることなので、多少のざわめきは起こったが、所詮人任せの旅である。誰かが何とかしてくれるだろうと、呑気に観光を楽しんだ。

結局、この日の後半から最終日まで、私達はマリオさんからバトンタッチしたイヴァンさんのバスに乗ることになった。毎日のように添乗員さんから、明日こそはマリオさんが戻ってくるだろうと聞かされたが、正直なところ私達にとっては、このまま無事に観光を続けられれば運転手はマリオさんでもイヴァンさんでもどちらでもよかった。もしかしたら、着た切り雀で一生懸命私達の日程に合わせようと努力してくれているかもしれないのに、現金なものである。個人的にも何度もクロアチアを旅し、現代のドゥブロヴニク人の心根のやさしさに心底惚れ込んでいる添乗員さんにさえ「かわいそうなヤツ」と片付けられて、ちょっとだけ気の毒に思った。マリオさんは、最後に「旅にご一

緒できなくて、本当に申し訳なく残念です。また、ぜひ、美しいクロアチアにいらしてください。心よりお待ちしております」と私達にメッセージを寄せてくれた。

旧ユーゴスラビア内戦は、1995年に終結した。内戦の勃発と同時に「世界危機遺産」に指定されていたドゥブロヴニク旧市街は、世界中からの支援と地元の人達の努力により美しい街並みを取り戻し、1998年に危機遺産指定を解除された。復興にあたって地元の人たちの中で、完全にもとの姿に甦らせるのか、被害を被った状態をあえて残すのか議論になったが、前者に決めたそうである。ドゥブロヴニク人がそのような決定を下し、甦った建物を内戦前と同じ目的に使用しているということは、観光活用の「美しい街並み」よりも、それを幾世代にも渡って大切に受け継いできたことこそが重要で、自らのアイデンティティの源はそこにあることを充分認識しているからに他ならないと私は思う。観光客が街に戻ってきたのは2000年頃からだそうだが、写真を撮れば買い物袋を提げたりして地元の人であることが一目でわかる人が必ず写っているし、庭先でバーベキューを楽しんでいる家族を見ることができる。500m四方ほどのこの街は、今も昔も私が大好きな「日常生活の場」なのである。

ところで、マリオさんが私達ツアーから離れた日、持ち主不明の鞆が一つ、バスのトランクから出てきた。ツアーの参加者は誰も荷物を増やしていないと言うし、不審に思った添乗員さんは、その鞆の中を確認した。すると、宛先に「マリオ」と書かれたダイレクトメールが出てきたのである。自分の荷物がなくなったと騒いだ朝、マリオさんは自分で自分の鞆をバスのトランクに積み、バスがエンコした時も、彼は自分で自分の鞆をイヴァンさんのバスに積み替えていたのに…。結局この旅で一番印象に残ったのは、どこまでも長閑でおっとりとしたマリオさんの笑顔かもしれない。



市壁の上からアドリア海を望む。海の方約170kmには、イタリア半島がある。